

「佐倉道を学ぶ」

コース:小岩～西船橋

平成30年度

佐倉学入門講座・地域人材育成講座

2018.12.19

蕨 由美



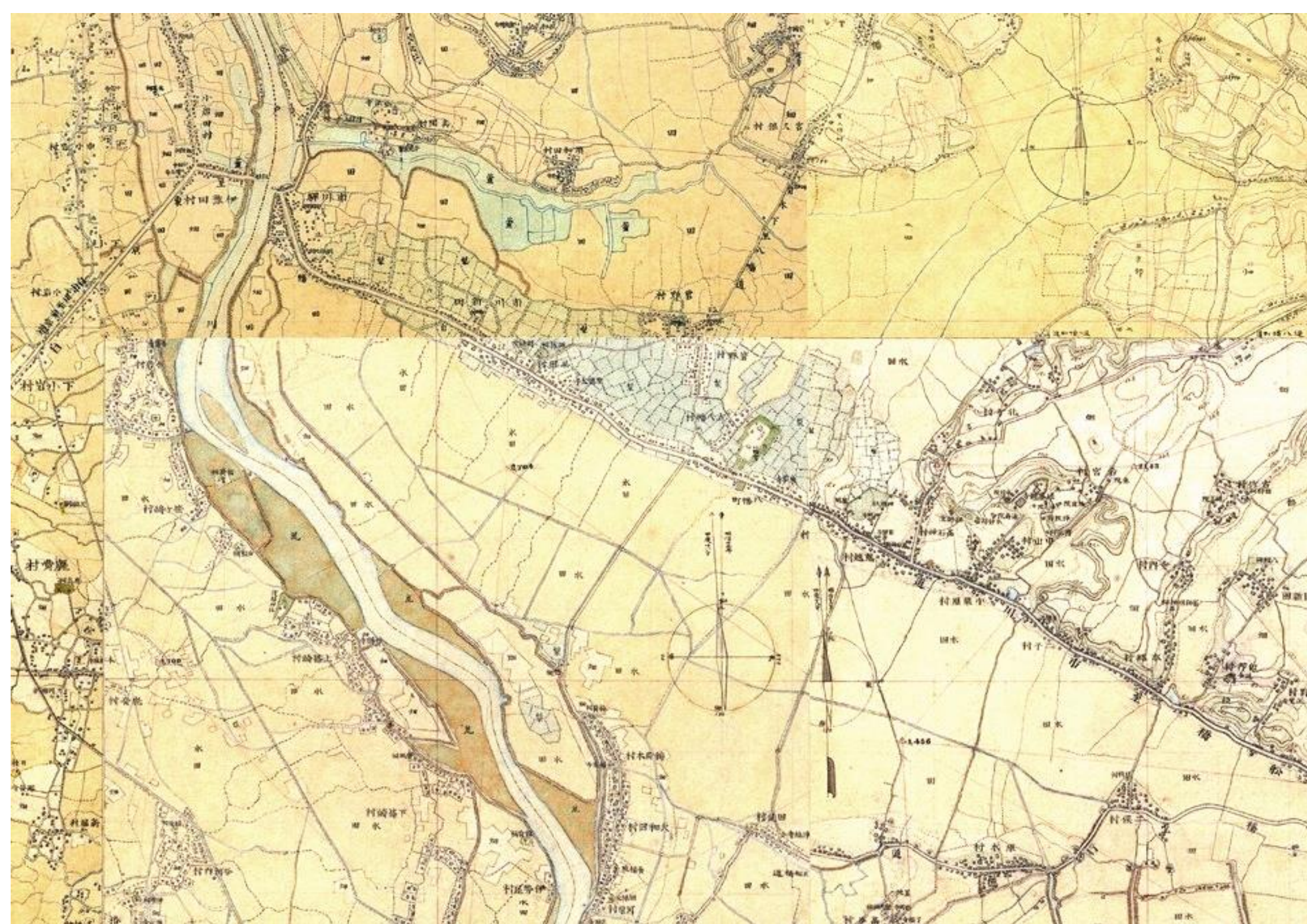


「佐倉道」は、佐倉の堀田氏をはじめとする房総の諸大名の参勤交代道で、千住～新宿～小岩を通り、佐倉城下までのこの道を、幕府も五街道に匹敵する街道として重要視し、早くから小岩市川の渡しには関所がおかれました。

同時に佐倉道は、江戸中期以降、成田山への参詣のため、庶民の往来でにぎわった「成田道」でもありました。

成田へは、江戸小網町から行徳船の利用もありましたが、「佐倉道」・「元佐倉道」を使った参詣も盛んで、江戸川区内には成田への道標も残されています。





御番所町とは関所前の界隈のことで、京成江戸川駅から南へ蔵前橋通りに至る道路部分が江戸川区史跡「御番所町跡」として登録されています。

ここは**佐倉道**と**元佐倉道**の合流するところで、南北に走る**岩槻道**にも接する交通の要衝でした。小岩市川の渡しが定船場となり、**御番所(関所)**が置かれたことから御番所町と称したと思われます。

江戸時代後期の地誌『新編武蔵風土記稿』(1828年成立)の「伊予田村」の項にも、関所は「新町内江戸川の傍にあり、ここを御番所町とも云」と書かれています。

『徳川実紀』延宝2年(1674)の記事にある佐倉道(元佐倉道)の小岩の駅(宿場)に当たるものと考えられます。



角屋、筑前屋、清水屋などの旅籠を兼ねた小料理屋をはじめ、井熊鮎、あめ屋、豆腐屋、ぬか屋、掛茶屋などがならんでいたと伝えられます。

角屋は近年まで同じ場所で旅館を営業していました。

江戸川につきあたる付近が関所跡で、関所から来ると正面左に大きな**道標**が望めました。

道標は今も原位置にあり、道路の様子も昔をしのばせます。

そのほかにも、江戸川の川岸にあった**常燈明**(宝林寺)や**関所役人中根平左衛門代々の合葬墓**(本蔵寺)など当時にゆかりのある旧跡がよく残っています。



御番所町の道標

江戸川駅出口北側のすし店前

①左:「伊与田の観音寺道道標」

安永4年(1775)建立。

正面:「是よりあさくさくわん世おん(浅草観世音)道
二り六丁 伊与田村中」

右面:「右 舟ばし迄三り(里) いちかわ道」

左面:「左 にいく(新宿)道
いわつきぢおんじ(岩槻慈恩寺)迄七り」。

元の位置は、やや北によった旧観世音道の入口。

②右:「成田道道標」

文久2年(1862)建立。

正面:「左 成田ミち」

右面:「文久二年壬戌□月吉日」

左面:「願主 中川平蔵 田辺茂助」

元の位置は、岩つき通りの角にあり、岩槻道から成田道(佐倉道)へ向かう道しるべであった。

街道筋の石造物解説 ① 道 標

道標は「道しるべ」「道印石」とも呼ばれ、旅人や通行人の便宜のため、木や石などに、それぞれの道が進む方向・目的地・距離(里程)を記して、道端に建てたものです。

道標には、行先のほかにも建立者や年号が刻まれ、その多くは今も分かれ道や路傍に立っており、また、道路整備で移動しても、多くは原位置が記録されていることから、江戸時代の交通の様相や古い道の姿を示してくれる貴重な歴史資料となっています。

現存する江戸時代の道標で残っているのは、すべて石造物であり、そのほとんどが道案内をすることによって、神仏の功德を得ようとする信仰心から設けられたものです。

したがって、すべて民衆の意志によって建立されたものです。





北野神社

(江戸川駅出口から南へすぐ)

旧伊予田村の鎮守。

江戸時代この地にあった天神社と稲荷神社の二社を明治42年に合祀、北野神社になる。

さらに一里塚にあった須賀神社を合祀し、須賀神社の年中行事「茅の輪くぐり」(江戸川区指定無形文化財)をここで行っている。





「御番所町の慈恩寺道石造道標」

関所から来ると正面左前方にある。

安永4年(1775)建立。

正面:「右 せんじゅ岩附志おんじ道
左り 江戸本所ミち」

右面:「左り いちかわミち
小岩御番所 世話人忠兵衛」

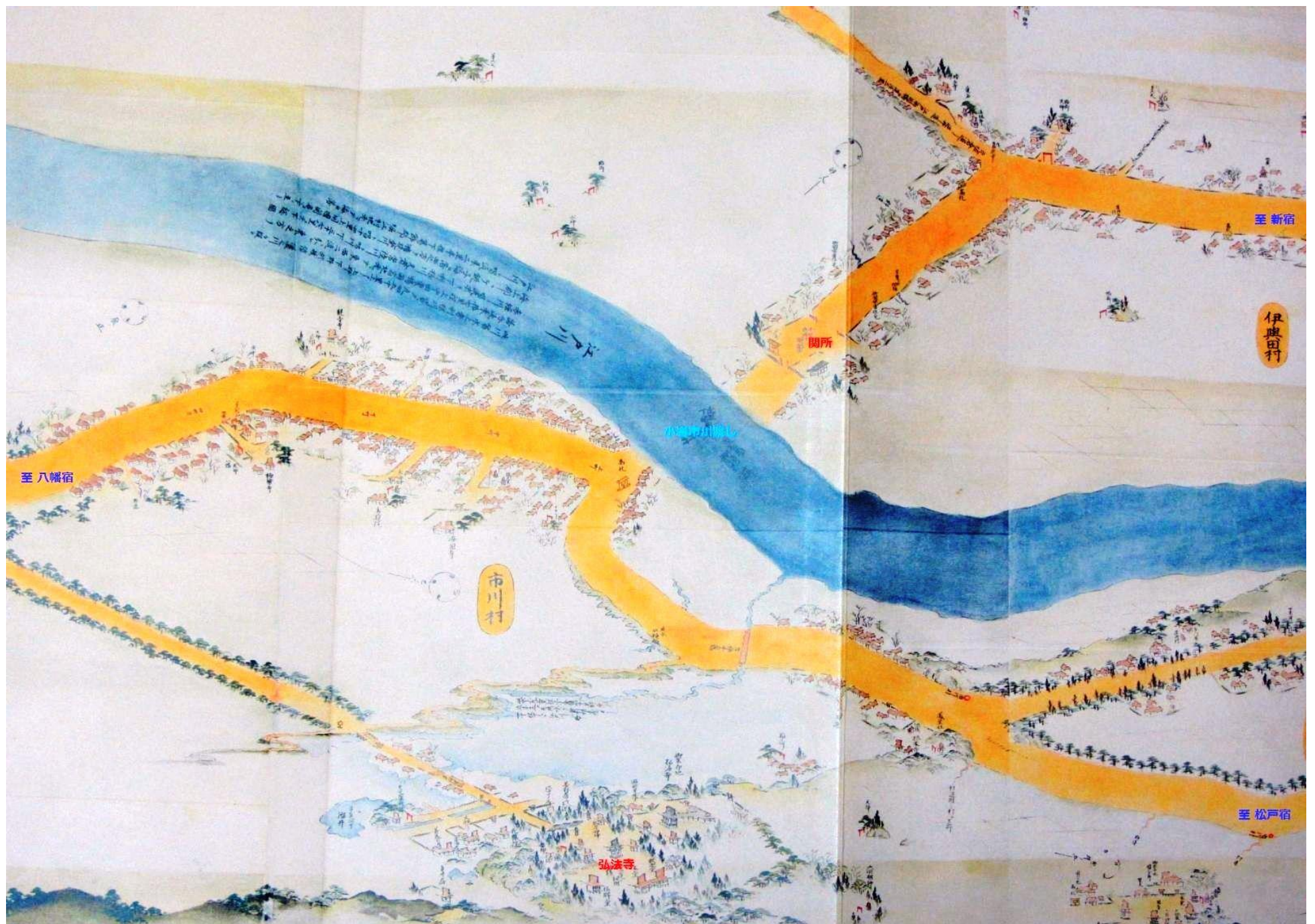
左面:「右 いち川みち
安永四末年 八月吉日
北八丁堀 石工 かつさや加右衛門」

江戸時代、庶民の間に霊場巡拝の風習がさかんになりました。

坂東33カ所観音霊場もそのひとつで、埼玉県岩槻市の古刹**慈恩寺**は、その12番札所として関東各地から参拝人を集めています。

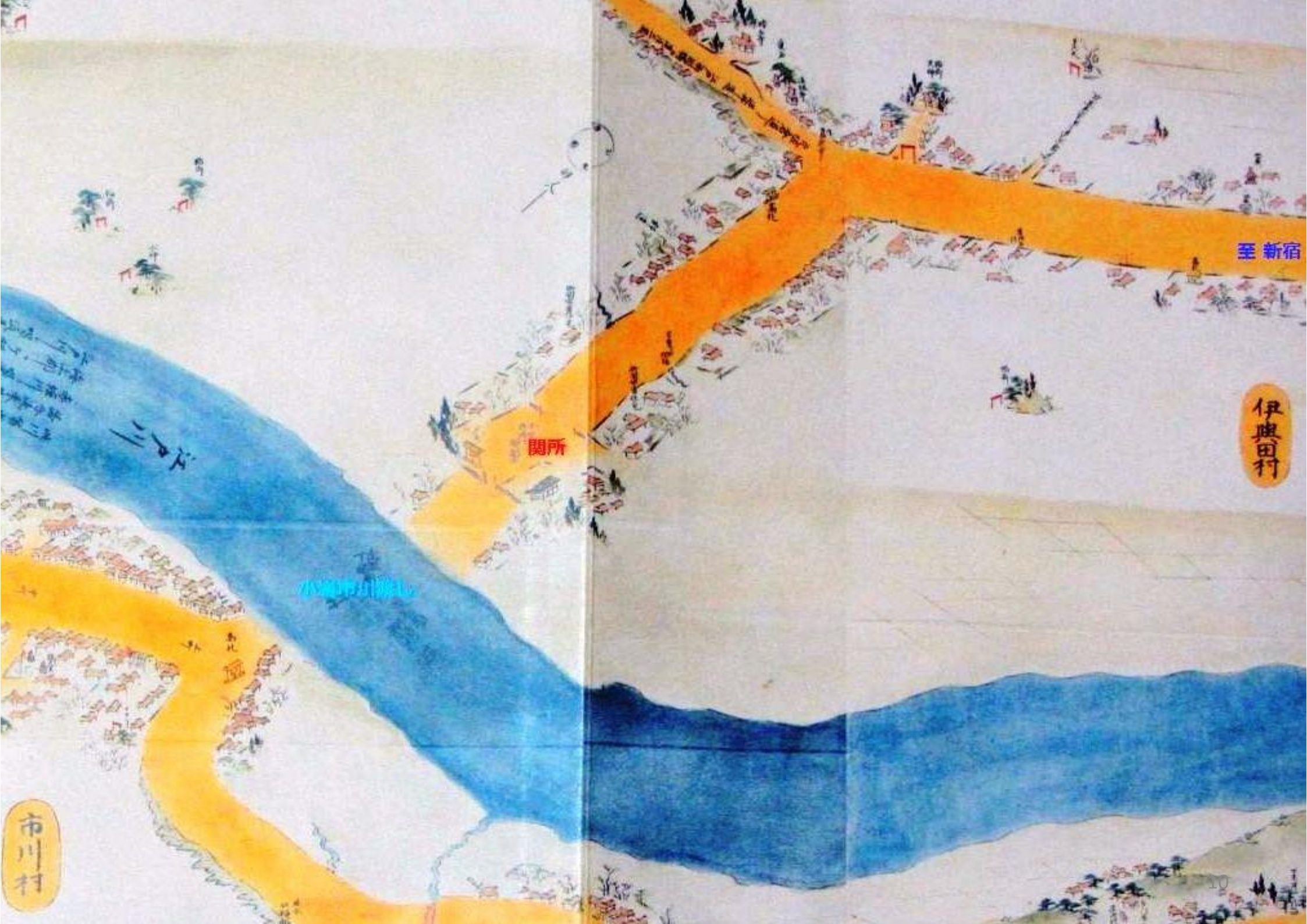
この道標は佐倉道と元佐倉道の合流点にあり、対岸市川から江戸川を渡って小岩市川関所を通るとほぼその道筋の正面に見えたと思われます。

房総方面から慈恩寺へお詣りする人びとは小岩市川の渡しを渡ってから、この道標を見て北へ曲がって行きました。



「水戸佐倉道分間延絵図」

寛政年間(1789～1801)に、幕府命により道中奉行が編修し、文化3年(1806)に完成



至新宿

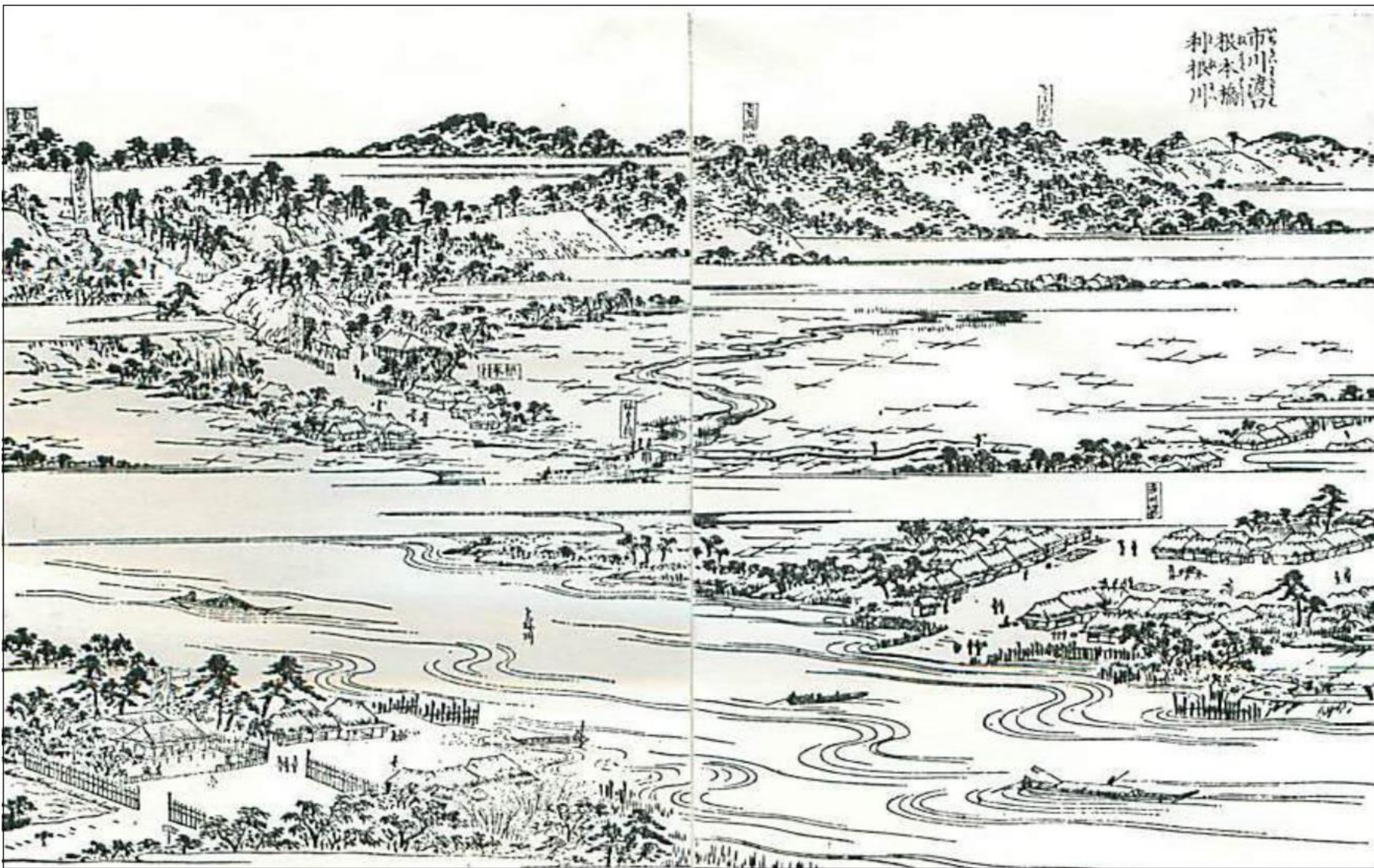
伊興田村

関所

市川村

市川村

市川渡
根本橋
利根川



『江戸名所図会・市川渡口』



常燈明

小岩市川の渡しにあった常燈明で、成田山を信仰する千住総講中によって、天保10年(1839)に建てられたものです。

成田山新勝寺は、天慶3年(940)草創と伝える古刹で不動霊場として知られています。

小岩市川の渡しは佐倉道の小岩市川関所にあり、成田参詣の道筋にもあたっていました。

高さ2メートル(総高4メートル)。

5段の台石も2メートル弱あり、台石銘には世話人や協賛者が刻まれています。

昭和9年(1934)の江戸川改修に当たり、宝林寺に移されました。

江戸川区登録有形文化財・建造物

街道筋の石造物解説 ② 庚申塔

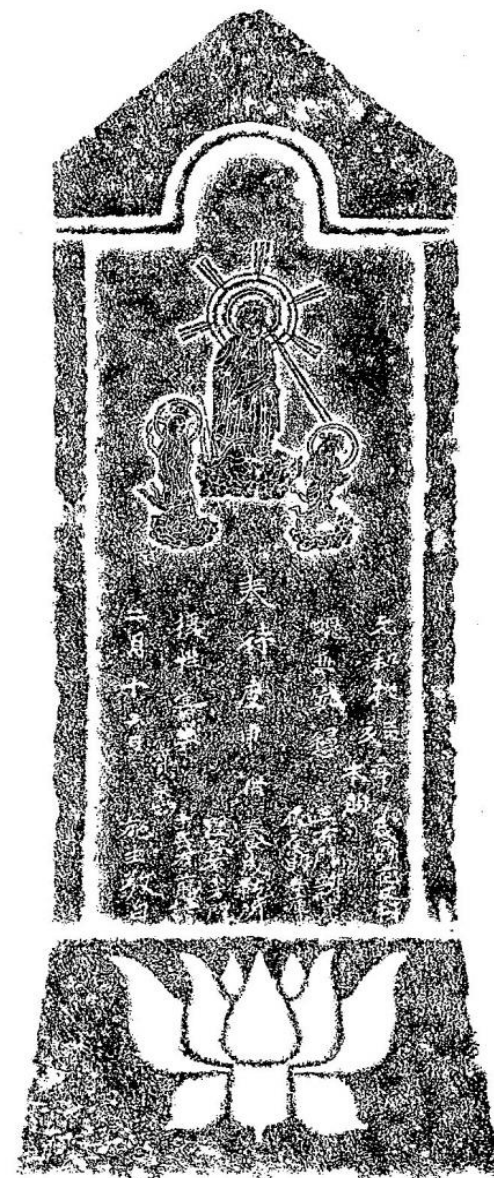
庚申塔は、最も普遍的で数も多く、近世からの村落共同体建立の石塔を代表する石造物です。

庚申待は、六十日に一回庚申の夜に、眠った人間の体から三尸が抜け出し天帝にその人の罪過を告げられないよう徹夜するという道教に由来した信仰で、室町時代ごろから庶民にも浸透し庚申講が行われるようになると、その供養の証しとして「庚申塔」を建立する風習が、江戸時代、各地に定着しました。

江戸時代の庚申塔の初出は、元和九年(1623)の足立区正覚院の弥陀三尊来迎塔と三郷市常楽寺の山王廿一社文字塔、千葉県最古は松戸市幸谷観音境内の寛永二年(1625)の山王廿一社文字塔と報告されており、荒川(現江戸川)流域を起源とすると考えられ、いずれも板碑型の文字塔です。

17世紀中葉のころの庚申塔の主尊は、阿弥陀・地蔵・観音など多様ですが、17世紀後葉から18世紀末までは青面金剛像が主流となり、日月・三猿・邪鬼・二鶏が付されることも多く、また18世紀以降は「庚申塔」の文字塔と推移していきます。

庚申塔は、ムラに悪霊が入らないよう、街道の辻に建てられることも多く、また道しるべを兼ねる庚申塔もみられます。



足立区正覚院
弥陀三尊来迎塔
元和9年(1623)

江戸時代の庚申塔を代表する宝林寺参道の庚申塔

寛文10 (1670) 舟型光背 地蔵菩薩立像	貞享3年 (1686) 駒型光背 青面金剛像	文化1 (1804) 駒型 文字碑
		
梵字 (カ) 「奉造立庚申搆人数所 伊予田新田」 人名 4 名	宝輪・矛・弓・矢・ショケラ・剣を持 つ六臂像。 日月・三猿・邪鬼。 両側に人名各 6 名ずつ	正面「庚申塔」 右面「伊與田御番所両村村講中」 左右面に人名各 4 名ずつ

関所役人 中根平左衛門代々の合葬墓 本蔵寺境内

本蔵寺は、日蓮宗の寺院。山号は晴立山。
江戸川区指定文化財の木像日朗上人、日像上人坐像を祀っています。

本蔵寺境内は、小岩市川関所の役人を代々務めた中根氏の館跡とされ、同氏の菩提寺と伝わっています。
境内には中根平左衛門家の代々合葬墓が残されています。



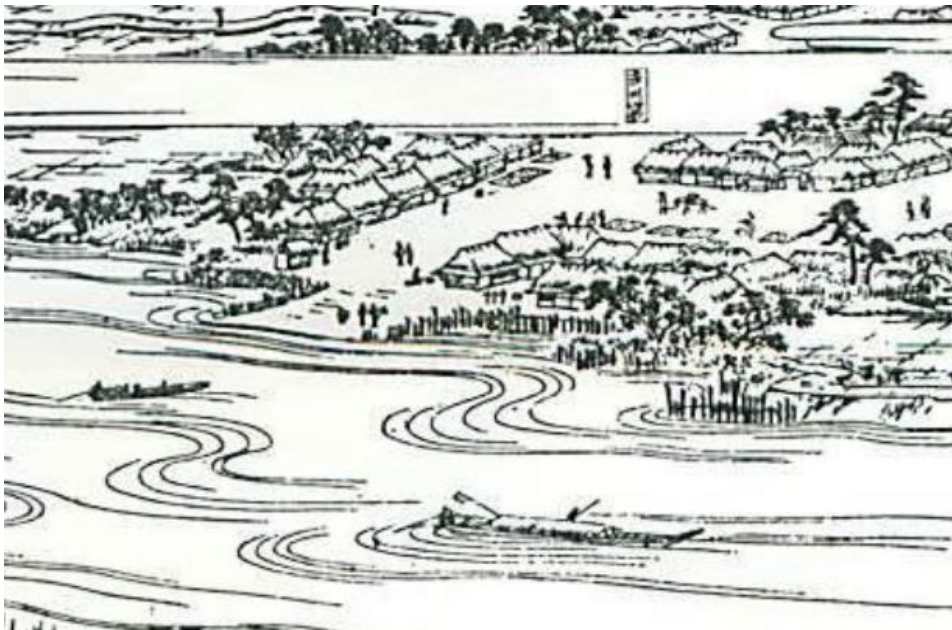
市川の渡し場跡・「市川関所跡」碑

小岩番所からの船着き場のあった所。

この渡し船の船頭などの管理は、市川村名主能勢家が中心に行っていました。

明治2年に関所が廃止されても、明治38年木造の「江戸川橋」が架けられるまで渡し船が往来していました。

昭和2年(1927)江戸川橋は、下流に架け替えられて現在の「市川橋」になっています。



市川に関所（番所）はありませんでしたが、昭和58年に「市川関所跡」碑が建立されています。⇒



「市川関所跡」

江戸時代以前の江戸川は太日川と呼ばれていた。奈良・平安時代の関所跡周辺には、井上駅家うへまゐりがおかれ、都と下総国を往来する公の使が太日川の渡し船と馬の乗りかえをおこなった。また、室町時代には、市川を旅した連歌師の宗長ねんがしが、その時の紀行文「東路の津登とうろのつと」のなかで、市川に渡があつたことを記しており、古くからここに人々が集い、川を渡っていたことがわかる。

やがて、江戸に幕府が置かれると、江戸を守るなどのため、関東の主な川に、船の渡場で旅人を調べる「定船場じようふなば」が設けられた。古くから渡があり市場でにぎわっていた市川が選ばれ、これが後に関所となった。

時を経て、江戸時代の中頃には、川のほか山や海を合わせ、全国各地にたくさんいかにの関所が設けられていた。これらの関所には取り締まりが厳しい関所と比較的ゆるやかな関所があり、市川の関所では江戸へ入る武器と江戸から出てゆく女性が、特に厳しく取り締まられた。

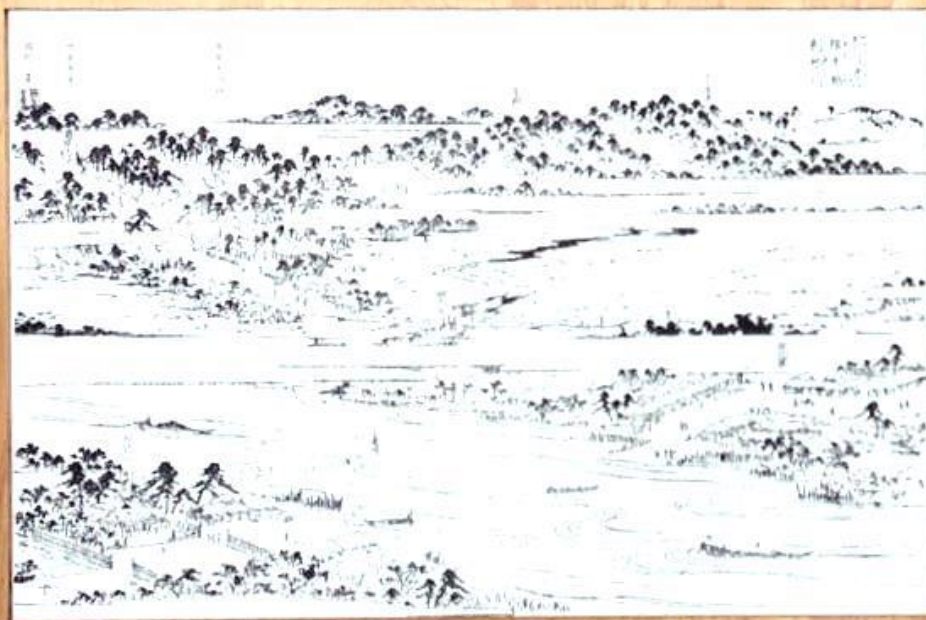
「市川関所」と呼ばれることもあつたが、多くの場合は「小岩・市川関所」と記され、対岸の二村が一对で一つの関所として定められていた。そして、分担して関所にまつわる役割を果たしていた。幕府の役人が旅人を調べた建物は小岩側にあつたので、市川村は緊急事態の

時に駆けつけて助ける役割を担い、名主の能勢家が取り調べをする役人を補佐した。また、江戸時代を通じて、江戸川には橋が架けられなかったのだ、関所を通り、水戸・佐倉道を往来する人々のために、市川村では、二〇人前後の船頭や人夫を雇っていた。そのため「御関所附渡船之村方おせきしよつとせんのむらかた」とも呼ばれた。

慶応から明治へと時代が変わった時、旧幕府軍と新政府軍の激しい戦いの舞台となり、明治二年（一八六九）に関所廃止令が出されて、その使命を終えてもなお、明治三十八年（一九〇五）に江戸川橋が架けられるまで、渡船の運行は続けられた。しかし、度重なる江戸川の護岸工事で、関所の建物や渡船場の正確な位置は、今日不明となっている。

平成十六年七月

市川市



江戸名所図会

観音寺前庚申堂 庚申塔道標

安永3年(1744)建立。
佐倉道と行徳街道の分岐点に建てられました。

正面:青面金剛像
右面:「安永三午天 十一月吉日」
左面:「これより 行とくみち」

観音寺は天正17年(1362)に開山された真言宗豊山派の寺院。
四郡大師・葛飾大師の40番札所。





日蓮宗真間弘法寺標識塔

「昭和32年極月」建立。

日蓮宗真間弘法寺への入口、
また真間の継橋、真間の手児奈
霊堂の入口です。

江戸時代もここに弘法寺御題
目標識塔が建っていました。

弘法寺は、真間の手児奈の霊
を供養するため、行基菩薩が求
法寺と称して創建したといいま
す。

建治元年(1275)時の住持了
性が日常上人との宗論に敗れ、
日蓮宗に改宗、日常の子で六老
僧の一人日頂を初代の貫主とし
たといえます。

天正19年(1591)徳川家康より
寺領30石の御朱印状を拝領、元
禄8年(1695)には水戸光圀も来
訪したという名刹です。



市川町道路元標

JR市川駅から佐倉道に出た
中央分離帯の緑地に御影石の
道路元標が建っています。

大正8年の道路元標の設置
に関する道路法施行令により
設置されました。



庚申塔道標

天明元年(1781)、市川村と市川新田の境に、市川新田の庚申講によって建てられました。

正面:「青面金剛」

左面:「西 西市川八丁 江戸西こく三り
北 真間寺七丁 国分寺十二丁」

右面:「東 八わた十六丁 中山一り
天明元年□月吉日 市川新田」





市川新田胡録神社の庚申塔

境内の東南角に三猿が彫られた庚申塔があります。風化のため銘文などは不明。



地蔵像塔道標 寛政11年(1799)建立。

正面:地蔵像 「寛政十一年」

右面:「右 やわた道」 左面:「左 すがの道」

すがの道は、菅野村(現 東菅野一丁目)の不動院への道しるべです。

「宮久保山道」道標

同じところに、明治期の「宮久保山道」道標が建っています。

東京開運女子会による宮久保高円寺(藤寺)への道しるべです。



葛飾八幡宮

寛平年間(889－898)宇多天皇の勅願によって、京都石清水八幡宮を勧請したものです。

祭神は誉田別命で、武人の崇敬があつく、源頼朝、太田道灌などが崇拝し、徳川家康は52石の朱印を与えました。

江戸時代は天台宗の八幡山法漸寺が別当寺として管理しており、社殿の前の鐘楼は往時を物語る遺物です。

山門の仁王像は行徳の徳願寺に移され、左大臣、右大臣の像が置かれて随神門となりました。境内の「千本公孫樹」は国の天然記念物。「元亨の梵鐘」などがあります。

9月15日から6日間にわたる祭礼は、俗に「八幡のぼろ市」と呼ばれる農具市がたち、多くの人が集まりました。



隨身門と参道



神楽殿大絵馬(神功皇后)



千本公孫樹

八幡不知森

「八幡の藪知らず」と言われ、この藪は入ってはいけない所、入ったら出てこられない所、一度入れば祟りがあると恐れられた所、と言い伝えられています。

理由は諸説ありますが、現地説明板によれば、古代からの「放生池」の跡地であったからとのこと。

八幡宮の放生会の行事が、中世に千葉氏の内紛で荒廃して途絶えてしまい、放生池には「入ってならぬ」ということのみが伝えられてきたものと推定しています。

万治年間(1658～61)、水戸黄門(徳川光圀)が藪に入り神の怒りに触れたという話が、後には錦絵となって広まりました。

「不知八幡森」の碑は 安政4年(1857)春、江戸の伊勢屋宇兵衛が建てたものです。



月岡芳年「不知藪八幡之実怪」。
水戸黄門(右)の前に異人があらわれる

東昌寺

曹洞宗の寺院で、本陣も脇本陣もなかった八幡宿では、必要が生じたとき宿泊所となりました。

墓地内には慶応4年(1868)の戊辰戦争(市川船橋戦争)のため、八幡で戦死した岡山藩と津藩の官軍兵士3名を葬った2基の墓石が建てられています。

「忠山義賢居士」 津藩 菅 鎬三郎

「義川深源居士 実道忠雄居士」 岡山藩 花房喜太夫 信正卯兵衛
(この二人の戒名がどちらかは不明)



葛飾大師52番
札所の標柱



市川・船橋戦争関係戦死者墓石一覧

No.	該当する墓石	市名	所在地
①	佐土原藩士簀毛次右衛門墓石	鎌ヶ谷市	大仏墓地
②	佐土原藩夫卒巳之助墓石	鎌ヶ谷市	大仏墓地
③	佐土原藩夫卒常吉墓石	船橋市	安立庵
④	福岡藩小室弥四郎墓石	船橋市	海神念仏堂
⑤	福岡藩夫卒三名連刻墓石	船橋市	海神念仏堂
⑥	津藩士菅鍋三郎墓石	市川市	東昌寺
⑦	備前藩士二名連刻墓石	市川市	東昌寺
①	鈴木梅之輔墓石	船橋市	法宣庵
②	姓氏不詳兵士墓石	船橋市	旭町三丁目共同墓地
③	姓氏不詳兵士墓石	船橋市	東光寺
④	綿貫元吉墓石	船橋市	慈雲寺
⑤	菅野鋭亮墓石	船橋市	了源寺
⑥	鈴木音次郎墓石	市川市	中山法華経寺

○は新政府軍、□は旧幕府軍

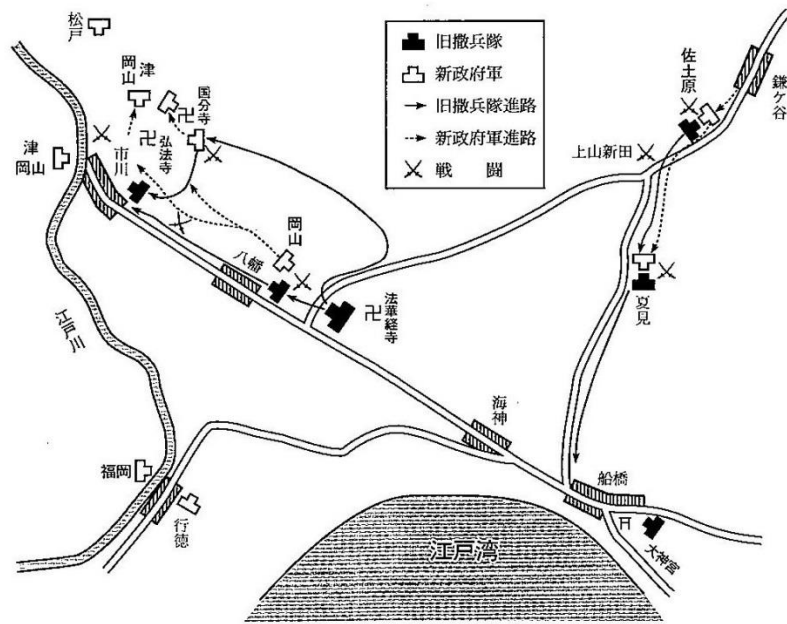


図-4 市川・船橋戦争戦闘図①（慶応4年閏4月3日午前）
〈山形紘氏著『市川・船橋戦争』掲載図を一部改変〉

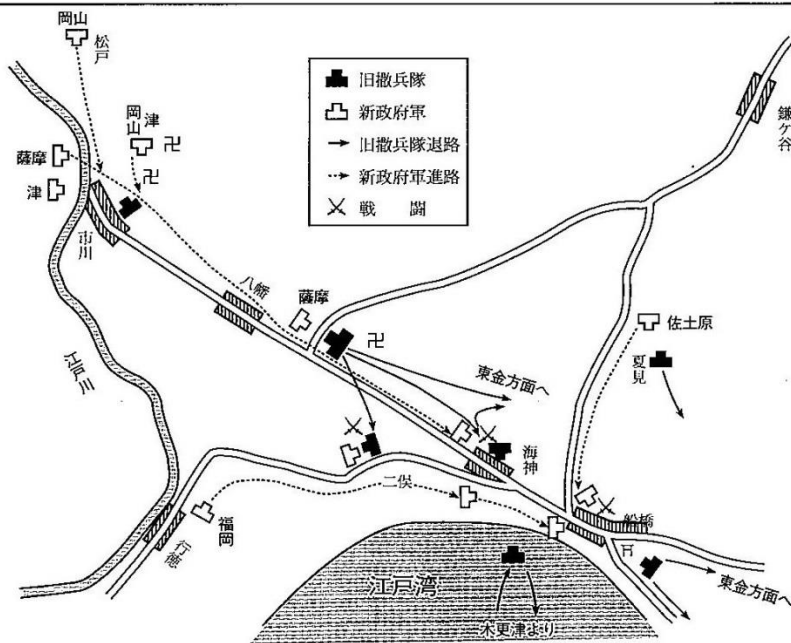


図-5 市川・船橋戦争戦闘図②（慶応4年閏4月3日午後）
〈山形紘氏著『市川・船橋戦争』掲載図を一部改変〉



真間川に架かる橋のたもとのモニュメント

正中山法華経寺 日蓮宗大本山 法華経寺

鎌倉時代の文応元年(1260年)創立で、山号は正中山。中山法華経寺とも呼ばれ、日蓮が最初に開いたお寺です。

総門の「黒門」は高麗門と呼ばれる型式で、市川市の文化財。

仁王門(赤門)は 大正時代の建造で、扁額は本阿弥光悦筆。

五重塔は、元和5年(1622)加賀の前田利光の寄進。重文。

祖師堂は、延宝6年(1678)に上棟、元禄15年に落慶。屋根は比翼入母屋造り。重文。

その他、法華堂、四足門などの国指定の重要文化財があります。



祖師堂
比翼入母屋造りの屋根が特徴⇒



「二子浦の池」(湧水池)の看板

本郷・二子地区の台地の南がわ下のほうには、溜と呼ばれる池がいくつもあり、水田に水をひくためのほか、日常生活にも利用されていました。

このあたりは、中世は、二子浦と呼ばれる海に面しており、日蓮上人が、鎌倉との行き来のために船出したという言い伝えがあります。



庚申塔 文政6年(1823)

本郷村との境に、中山村の講中によって建てられました。
この坂を上ると寺内村に至ります。

正面「庚申塔 如日月水明 能除諸幽冥」
右面「文政六癸未年」 左面「十一月吉日」



葛飾神社

葛羅の井のそばにあった元宮「葛飾大明神」を、勝間田の池のほとりの熊野神社に合祀し「葛飾神社」としたのは、大正5年(1916年)のこと。境内には、熊野神社のころからのクロマツがそびえています。

元宮は旧本郷村の鎮守であり、葛飾郡の総社でした。

「葛飾大明神」を示す町石(道標)が階段左の斜面に移されています。

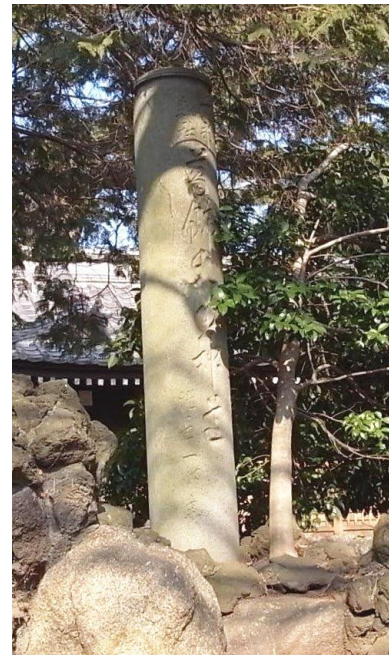
宝暦11年(1761)「是よりかつしか大明神一町半」

文政11年(1828)「一郡惣社葛飾大明神道 従是一町余」

測量の際の標高(5.3m)の基本となる点におかれた「水準点」の石があります。



宝暦11年町石



文政11年町石



水準点の石

『江戸名所図会』
天保7年(1836)



「勝間田の池」跡

「折り所」(おりと)の池(「葛飾誌略」文政年間)、
または本郷の溜池と呼ばれた池を、江戸時代の文
人たちにより、万葉集の奈良の勝間田の池になぞ
らえ、また春日神社を奈良の春日山に擬して、その
風光をめでした。中世は舟着場であった。

昭和40年頃に埋められて、公園になっています。





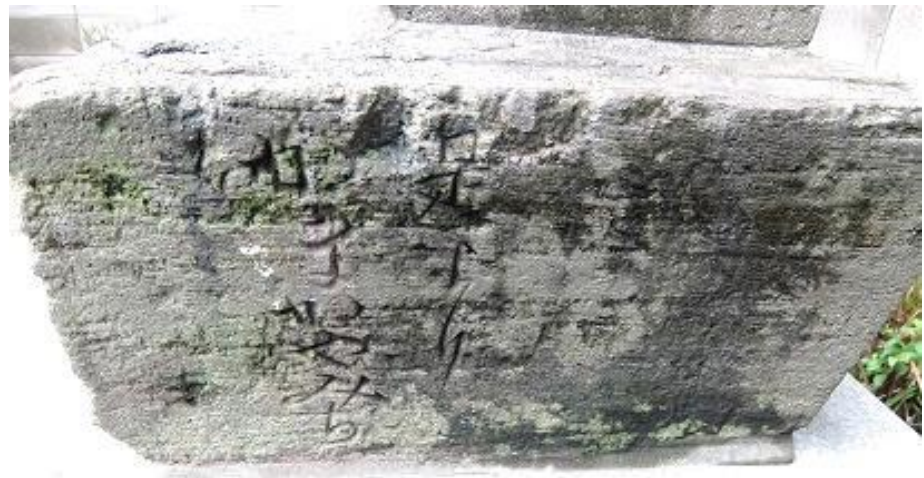
西船橋の行田方面入口三叉路の石塔群

庚申塔

寛政12年(1800)寺内新田の講中17人が建立
台石右面「是より／かまがやみち」

庚申幢 年代不詳 日月と三猿を浮彫り

古峰神社石祠



無線電信所道標 大正6年(1917)

「ニイタカヤマノボレ ー二〇八」を発信した行田無線電信所への道標。

前の道を千葉街道に出た角にありましたが、千葉街道の道路改修のため、この三叉路に移されました。

左側「東 船橋方面二至ル 西 市川方面二至ル」

右側「従是北八百餘間 至無線電信所 大正六年行啓
奉迎二付国県郡費補助ヲ受ケ耕地会沿道民ノ寄附並村費金
四千餘円ヲ以テ葛飾村ニ於テ大改修工事ヲ施行セル記念ニ
建之」

今回はここがゴールです。お疲れ様でした。
帰路の最寄駅は、京成西船駅です。

座学の皆さま、ご清聴をありがとうございました。

